

先月号に「オオミズアオの繭作り？」を途中まで書きましたが、その続きです。

緑色の大きな終令幼虫たちは、ある朝起きてみると一夜で茶色に変身していました。そして軟便をしたので、(蝶も蛾も蛹になる前に軟便をして身体の水分を排泄します) 繭作りが始まりそうだと、私は急いでダンボールの箱の中に土と落ち葉を敷きました。2匹は枝を降りて、ダンボール箱の壁に落ち葉を2、3枚くっつけて外から見えないように落ち葉の要塞を作り、その中で茶色の薄い膜状の繭を作りました。



別の1匹は枝につかまっただま、葉を2枚閉じ合わせてその中で茶色の繭を作りました。どちらも見えるのは葉っぱだけで、これでは繭を探しても見つからないはず。それにしても枝を降りて地上で作ると、枝上で作ると、色々でした。友人と私の推理はどちらもはずれてはいなかったのです。オオミズアオは結構ラフな性質と言うのが、私たちの結論になりました。

話は変わって、先日家の軒下の砂地に、小さいすり鉢状の穴がいくつも見つかりました。今まではなかったのに、と探してみると10個くらいもあります。私は嬉しくてにんまりしました。子ども時代の友、アリジゴクの巣です。

そういえば夏、トンボを弱々しくしたようなウスバカゲロウがふわふわと庭を飛んでいるのを見た覚えがあります。アリジゴクはウスバカゲロウの赤ちゃんなのです。

お母さんのウスバカゲロウは雨の当たらない軒下の砂地を探して卵を産みつけ、卵から孵ったアリジゴクはすり鉢状の巣を作り始めます。身体が少しずつ大きくなると、作る巣も少しずつ大きくなるよう

です。

蟻がこの砂の穴に落ち込むと、アリジゴクは底からパッパッと砂をかけて蟻を上れなくし、牙でつかまえて体液を吸い、ポイと外に放り投げるのです。でもめったに蟻は通りかかりません。餌にありつくまで、何日でもひたすら待ち続ける辛抱強い生き方です。

子どもの頃、寺や神社の縁の下にアリジゴクの巣があり、しゃがみ込んで指先で少しずつ掘って、大きな牙のある砂色の虫を見つけ出す遊びを飽きることなくやりました。

私の育った岡山県北部ではアリジゴクを「こま

こま」と呼んでいました。「こまこま出一よ、こま出一よ」と唄いながら掘り出すのです。ついに掘り出して手のひらに乗せると、丸っぽい体でコロコロと転がって動きません。でも砂の上におくと、いつのまにか後ずさりしながらすり鉢の穴を作っていきます。

アリジゴクの巣は探してみると、意外に近くでも見つかります。西緑地へ行く山道の樹の根っこ辺りの砂地でも見つけました。

日本各地で子どもたちが遊んだ証拠に、沢山の方言の呼び名が残っています。絵本「たくさんのおしぎ・アリジゴク百の名前」(福音館)によると、地方によってサルコムシ、グルグルモンジ、マイマイその他面白い呼び名がいっぱいです。

あなたの故郷ではアリジゴクをどんな名前と呼んでいましたか？

